兵庫史を歩く No.34　（2023.3.18）

海を眺めながらの古墳めぐり

古墳の数が日本で一番多いのは？

日本で発掘されている古墳の数は全国で 15 万 9636 基あると言われている（平成 28 年度、文化庁)。有名な古墳は 2019 年 7 月に世界遺産に登録された「百舌鳥古市古墳群」や「高松塚古墳」「石舞台古墳」などであり、大阪や奈良にあるものが名高い。

従って古墳の数も大阪や奈良が多いと思いがちだが、全国で一番多いのはなんと兵庫県なのだ。兵庫県には 1 万 8851 基あり、日本の全古墳の約 12%を占めている。

また、兵庫県は遺跡の数と銅鐸出土数でも全国一である。

なぜ兵庫県が一番多いのか？

その理由を解くヒントは、古墳の成り立ちと当時の兵庫県の置かれた位置との関係にあると思われる。

① 前方後円墳は大王を頂点とするヤマト王権の首長墓と考えられており、日本独特の墳墓形式である。この前方後円墳が出現したのは 3 世紀半ばから 8 世紀末までと言われている。この時期はヤマト王権が奈良盆地で勢力を拡大する時期と一致する。この時ヤマト王権の大王の下に、各地の有力な豪族が連合して政権を支える、いわゆる連合国家であったと思われる。そして各地の豪族は自身の勢力を誇示するために、競うようにして古墳を造営した。

従って兵庫県に多くの古墳が築かれたのは、ヤマト王権に深く関わった有力な豪族がそれだけ多く住んでいたということを示していると考えられる。

② 播磨・摂津地方には大小約 100 基を超す前方後円墳がある、このように密集して古墳があるのは全国的にも非常に珍しい。その背景には古代に但馬地方を通じて、朝鮮半島から高度な土木技術などを身につけた渡来人が多く住み着いたことが大きいと考えられる。

③ 有力な豪族が多かったということは、それだけ人口が多かったということである。六甲山地から南流する急流の河川により、古墳時代には扇状地が形成され、いち早く集落が生まれたと考えられる。温暖な気候に恵まれていたこともあり、多くの人が定住したのであろう。

（1）きつね塚古墳（神戸市指定史跡）

明石海峡を望む段丘周辺には古くから人が住んでおり、弥生集落や古墳などが多く見つかっており、きつね塚古墳もそんな遺跡の一つである。

直径 24mの円墳であり、6 世紀後半ではあまり例がない二重の濠が掘られている。外側の濠の直径は 52m、墳丘は二段の斜面でできており、すべて盛り土で造られている。

埋葬施設は全長 9.5mの横穴式石室で、中には家形石棺が納められていた。金銅製の馬具や土器も見つかっている。それらの遺物から西暦 580 年頃に造られたことがわかる。

国内の円墳は小規模なものが多い。高松塚古墳は 18mであることを考えると、24mは円墳の中では大きい部類に入る。このことから被葬者は明石海峡の水先案内をする部族の首長ではないかと推測されている。

（2）大歳山遺跡公園（神戸市指定史跡）

明石海峡大橋を望む標高 30mの高台にある遺跡で、あまり知名度はないが、とても良い景色が堪能できる。

大正 15 年明石原人の発見者として著名な直良信夫（なおらのぶお）博士が、この地で縄文時代前期（今から 5500 年前）の土器を発見し、「大歳山遺跡」と名付けられた。

その後も幾度か発掘調査が行われ、縄文時代の土器・石器が出土するだけでなく、弥生時代前期と後期にも集落が営まれていたことがわかった。さらに古墳時代には墓地域になったようで円墳や前方後円墳が築造された。要するに幅広い時代にわたって人々が生活していたとされる珍しい複合遺跡である

その結果、遺跡公園内には弥生時代後期（2 世紀頃）の竪穴式住居と古墳時代後期（6 世紀頃）の前方後円墳が並んで復元・保存されている。

昭和 40 年代には宅地開発により消滅の危機にさらされたが、神戸市が遺跡の中心部を買い取り、昭和 49 年（1974）に遺跡公園として開園した。

（3）苔谷公園

神戸淡路鳴門自動車道の開通に合わせて整備された公園。展望休憩所から明石海峡を行き来する船の眺めは時間を忘れさせるほど。地元の人以外にはあまり知られていない隠れた展望スポットである。

（4）五色塚古墳（国指定史跡）

神戸市垂水区の海辺から近い淡路島を望む台地上に築かれた前方後円墳だ。全長 194m で、兵庫県では一番大きな古墳である。淡路島へ向かって前方部を延ばすように、今から 1600 年ほど前の 4 世紀の終わりごろに築かれた「巨体」がそびえる。壮大な規模もさることながら、特筆すべきはその立地である。海岸に隣接し、すぐ後ろに淡路島が望める。つまり、五色塚はバックにある畿内勢力を誇示し、明石海峡を通過する人々を威嚇する狙いがあったと思われる。明石海峡をゆく当時の人々は誰もが船上から驚きをもってその威容を仰ぎ見たであろう巨大な人工物である。

五色塚古墳は築造時の姿に復元された全国初の古墳である。大正 10 年（1921）国史跡に指定を受け、戦前までは他の古墳のように樹木に覆われていたが、戦時中に木々が伐採された。木造船の建造や、燃料用に松の根の油を採取するためだ。食糧難の戦後は墳丘に段々畑が造られ、荒れ果てた。一時期は明石海峡大橋の橋脚をつくる候補地にもなったほど。一転して「人々が自由に立ち入ることができて、大橋を望み、いにしえに思いをはせることができる場に」との構想の下、昭和 40 年から 10 年かけて 4 世紀末に築かれた当初の人工的な構造物として復元整備された。葺石が全体を覆い、円筒埴輪が立ち並ぶ往時の姿を取り戻した。

五色塚古墳は千壺古墳ともいわれるが、墳丘は三段築成で、墳丘表面の各段には円筒埴輪が巡らされるほか、各段斜面には葺石が敷かれている。埴輪は推計 2200 本、葺石は推計 223 万個、2784 トンに及び、上段と中段の葺石は淡路島から運ばれたものである。

被葬者は誰なのか？

「謎に満ちた古墳である」と言われている。

中国大陸から当時奈良盆地に勢力を拡大していたヤマト王権のある奈良に向かう船は必ず明石海峡を通らないといけない。いわばヤマト王権にとっては玄関口といえる明石海峡である。一体被葬者は誰なのか？一般には被葬者は明石海峡一帯を支配した海人系の有力豪族だと言われている。

だが、疑問点も多い。

① 築造された場所周辺は段丘の上で、耕作には適していない。全く生産基盤がなく、しかも集落の跡もほとんど見当たらない場所に突然五色塚古墳が出現したことになる。
② 地方の一豪族の築造にしてはあまりにも巨大すぎる。
③ 五色塚古墳はヤマト王権の古墳と形が全く同じで、大きさだけが異なる相似形だともいわれる。
④ 当時の墳丘を覆っていたのは、淡路島東側の東浦海岸にある黒い石である。なぜ地元の石材を使わずに、流れの速い海峡を横切ってまで、対岸の島から調達したのか。これには途方もないエネルギーと労力が必要である。それが可能なのは軍船であり、ヤマト王権の水軍以外には考えられないのではないか。

これらを考え合わせれば、単に明石海峡一帯を支配した有力豪族ではなく、巨大な規模からみてヤマト王権の強い関与を示唆する有力な意見もある。更には被葬者をヤマト王権から派遣された人物との意見もある。いまだ謎に包まれたままである。

（次回予告） 2023.4.1

兵庫史を歩く No.35　もう一つの廃線跡へ

神戸臨港線廃線跡をめぐる